

1. アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。
2. アブラハムにイサクが生まれ、イサクにヤコブが生まれ、ヤコブにユダとその兄弟たちが生まれ、
3. ユダに、タマルによってパレスとザラが生まれ、パレスにエスロンが生まれ、エスロンにアラムが生まれ、
4. アラムにアミナダブが生まれ、アミナダブにナアソンが生まれ、ナアソンにサルモンが生まれ、
5. サルモンに、ラハブによってボアズが生まれ、ボアズに、ルツによってオベデが生まれ、オベデにエッサイが生まれ、
6. エッサイにダビデ王が生まれた。ダビデに、ウリヤの妻によってソロモンが生まれ、
7. ソロモンにレハベアムが生まれ、レハベアムにアビヤが生まれ、アビヤにアサが生まれ、
8. アサにヨサパテが生まれ、ヨサパテにヨラムが生まれ、ヨラムにウジヤが生まれ、
9. ウジヤにヨタムが生まれ、ヨタムにアハズが生まれ、アハズにヒゼキヤが生まれ、
10. ヒゼキヤにマナセが生まれ、マナセにアモンが生まれ、アモンにヨシヤが生まれ、
11. ヨシヤに、バビロン移住のころエコニヤとその兄弟たちが生まれた。
12. バビロン移住の後、エコニヤにサラテルが生まれ、サラテルにゾロバベルが生まれ、
13. ゾロバベルにアビウデが生まれ、アビウデにエリヤキムが生まれ、エリヤキムにアゾルが生まれ、
14. アゾルにサドクが生まれ、サドクにアキムが生まれ、アキムにエリウデが生まれ、
15. エリウデにエレアザルが生まれ、エレアザルにマタンが生まれ、マタンにヤコブが生まれ、
16. ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた。キリストと呼ばれるイエスはこのマリヤからお生まれになった。
17. それで、アブラハムからダビデまでの代が全部で十四代、ダビデからバビロン移住までが十四代、バビロン移住からキリストまでが十四代になる。

説教

今日は待降節（アドヴェント）第二週目です。イエスさまの御降誕の意味を考えながらクリスマスまでの時を過ごしていますが、今日はマタイの福音書第一章の前半を学びましょう。

マタイの福音書は新約聖書の一番最初にあります。生まれて初めて新約聖書を手にして読み始めると、まずはこの系図を読まなければなりません。飛ばして読めばいいのですが、几帳面な人は最初から真面目に読んで、その結果面白くないと思うようになるかも知れません。でも、この前半の系図は、実は旧約聖書に於けるイスラエルの歴史全体を要約していて、とても大切な意味があります。

まず、書き出しには「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」とあります。文字通りには「アブラハムの子の、ダビデの子の」です。「系図」と訳されているギリシャ語「ゲネセオース」は、英語で「ジェネシス」で、創世記の英語の表題です。つまり、聖書記者のマタイは、これから書き記す物語が「イエスキリストによる新たな創世記だ」と言うのです。神が天地万物を創造してスタートした人類の歴史は、最初の人間アダム以来の墮落によって呪われて台無しにされました。それを教えているのが旧約聖書ですが、神はこの墮落した人類の歴史にイエス・キリストを送って、全く新しい人類の歴史を再創造し再スタートさせる、これはイエス・キリストによる新たな創世記だ、マタイはそう言うのです。

「アブラハムの子孫、ダビデの子孫」とあるように、イエスさまは「アブラハムの子孫」であり「ダビデの

子孫」でした。創世記を見ると、神が造られた人類が墮落して、ノアの洪水の後、ノアの子孫が世界中に増え広がっていく中で、神はアブラハムとその子孫をその中から特別に選んで神の民となさいます。そして、「地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される」と約束されました（創世記 28:14）。それで、アブラハムの子孫すなわちイスラエルは、増えて一つの王国を形成するほどになります。その最盛期がダビデの時代でした。

2 節から 16 節までのイスラエルの系図を要約したのが 17 節ですが、そこにはこう区分されています。「それで、アブラハムからダビデまでの代が全部で十四代、ダビデからバビロン移住までが十四代、バビロン移住からキリストまでが十四代になる。」「十四」は、聖書では一週間の「七」という完全数の二倍で、「十四代」は一つの完結した期間を意味します。つまり、これら三つの期間はそれぞれに意味のある完結した期間であるということになります。それぞれにはどういう意味があるのでしょうか。最初の「アブラハムからダビデまで」は、ただひとりの人アブラハムが一つの王国を形成するまでに増え、さらにはそれがイスラエルの絶頂期を迎える、という上り調子の時期およそ 750 年間です。続く「ダビデからバビロン移住まで」は、その後、王国が墮落しながらも、善王や預言者の活躍などにより罪を悔い改める改革が起こって何度も危機を乗り越えるのですが、最後は力尽きて神のさばきで大国バビロンに滅ぼされて捕囚にされてしまうまでのおよそ 400 年間です。そして、最後の「バビロン移住からキリストまで」は、亡国のバビロン捕囚時代からキリスト誕生までの、聖書にも出てこない、およそ 575 年間となります。つまり、この系図に記されたそれぞれの「十四代」×3 は、イスラエル栄枯盛衰の歴史を最も簡潔に言い表していることとなります。

神の約束と恵みによって祝福されて栄えたものの、それが衰え没落してしまった原因は、一体どこにあるのでしょうか。旧約聖書を読むと、その原因が神の民イスラエルの罪にあったことがわかります。系図に登場する人物ひとりひとりを旧約聖書で調べて検討するだけでもある程度は理解できます。イスラエルは、罪に満ちたこの世界に神の栄光をあらわして祝福をもたらすために神に特別に選ばれました。そのような活躍ができた時期もありましたが、最後は神に呪われ、滅びます。世界の祝福の基ならぬ呪いの見本となります。そして、滅びた原因はただひとえに彼らの罪の故でありました。

通常は男性中心に記されるはずの系図に女性が 4 名登場します。でも、これがまたそれぞれ「訳あり」の女性たちです。3 節の「タマル」は「ユダ」の息子の嫁です。要するに夫の父親との間にもうけた子どもがダビデの先祖となりイエスキリストの先祖になるのです。5 節の「ルツ」はモアブ人です。このモアブ人がまたアブラハムの甥であるロトとその娘との間にできた子の子孫で、あまりにおぞましいので「モアブ人は主の集会に加わってはならない。その十代目の子孫さえ、決して、主の集会に、はいることはできない」と律法に定められたほどです（申命記 23:3）。5 節の「ラハブ」はカナン人で、しかも売春婦です。そして、6 節の「ウリヤの妻」バテシェバに至っては、わざわざ「ウリヤの妻」とマタイが記しているように、人妻なのです。その人妻とダビデは不倫して、しかも自分の不倫の証拠隠滅のために、ウリヤをわざわざ激戦地に送って戦死させるという殺人まで犯します。そうまでして一緒になったバテシェバとの間に生まれた子供がソロモンだと、マタイは包み隠さず記録しているのです。

その意味では、イスラエルの歴史は、神の恵みの歴史ではあるけれども、同時に罪の歴史であり、そういう、いわば完全に没落きったイスラエルのただ中に、彼らを救う救い主イエスキリストがお生まれになったとすることができます。でも、マタイがわざわざ女性を登場させているのは、単にイスラエルの罪の歴史を引き立たせるためではありません。それは、彼女たちのような大変な境遇にある者にも神の救いがあることを、読者に証しするためです。

詳しくはその箇所を読めばわかりますが、タマルがしゅうとのユダによって子供を残そうとしたのにはそれなりの事情があり、正当な理由がありました。それでユダは「あの女は私よりも正しい。私が彼女を、わが子

シェラに与えなかったことによるものだ。」と、タマルの正しさを認めざるを得ませんでした（創世記 38:6～26）。ラハブは確かにカナン人の売春婦でしたが、イスラエルのエリコ攻略に協力して大きく貢献します（ヨシュア 2:1～21）。ルツは、モアブ人でしたが、夫を亡くした後にも「あなたの神は私の神」と立派に信仰告白をして、よく姑に仕え、その結果としてボアズと再婚できました（ルツ記）。バテシェバは、確かにダビデと不倫して、いわば強引に結婚しましたが、その時身ごもった子供は死に、自分たちの犯した罪を思い知らされながらも、その悲しみを乗り越えてソロモンを生みます（Ⅱサムエル 11:1～12:25）。

つまり、ここに記録されている女性たちは、それぞれ後ろ指を指されるような、罪深く、忌まわしい、悲惨で苦しい状況にありながらも、それに埋もれて滅びることなく、何らかの形で現状を打開してきた特別な女性たちなのです。旧約の物語を知っている者なら、彼女たちの名前を聞くと、その話にならない罪深い状況を知ると同時に、それでもそこから這い上がって、輝かしいダビデの家系に名を連ね、さらには栄光の救い主の系図に名を永遠に刻まれるに至った事実を思い知ることになります。

そして、これは、彼女たちのいかなる功績にもよらず、神の恵みによることでした。死んだも同然の彼女たちを生き返らせたイスラエルの神は、ダビデの王国を復興させ、死んだ罪人にいのちを吹き込み、罪に満ちたこの世界をこれから新しく造り変えることができる、イエス・キリストは「アブラハム子、ダビデの子」である、ここに救い主の系図に込めたマタイの力強いメッセージがあるのです。